

日本語複合動詞の構造

―複合動詞の自他と語構成を中心に―

研究動機・背景

日本語において、品詞は十二種に分けられるが、その中で、動詞は種類や変化が非常に複雑だと言われている。また、「動詞連用形+動詞基本形」(V1+V2)の組み合わせから成り立つ複合動詞は、さらなる多くの種類と複雑な形を持ち、変化に富み、多くの日本語学習者を悩ませている。松田(2002)は「日本語学習者にとって上級者になっても習得の難しい学習項目の一つである」と述べている。

私は大学時代に日本語を独習した。初めて複合動詞に接したのは、当時使っていた教材に出てきた「書き始める」と「働き始める」の二つの動詞であった。その二つの単語について教科書に書いてあった品詞の分類はそれぞれ「下一他」と「下一自」であった。すなわち「書き始める」は他動詞で、「働き始める」は自動詞であった。それを見て、私は複合動詞の自他は前項動詞(V1)に対応するのではないかと考えた。

しかしながら、そうとは限らなかった。その例として、「売り切る」・「売り切れる」のような自他の対応関係を有する複合動詞がある。「売る」は「五他」であり、「切る」と「切れる」はそれぞれ「五他」と「下一自」である。「売り切る」は他動詞であり、「売り切れる」は自動詞であることから、このような自他のペアを持つ複合動詞の自他は後項動詞(V2)に従うように見える。しかしながら、同じく「切る」を後項動詞にする複合動詞「疲れ切る」や「決まり切る」は、前述のように前項動詞の「疲れる」や「決まる」に対応し、自動詞になる。

私はこのように不規則な自他現象に、「複合動詞の自他には何か固定的な対応関係がないのか。どう覚えればいいのか。」という疑問を抱き、在籍している日本語学校の教師に尋ねたことがあるが、「一つ一つ覚えるしかないだろう。」という答えしかもらえなかった。しかし、「複合動詞の自他に関する対応法則は本当に存在しないのか。」という疑問は私の中で消えることはなかった。

さらに、前に挙げた「疲れ切る」のように、前項動詞も複合動詞そのものも自動詞でありながら、後項動詞は自動詞の「切れる」ではなく、それと対応する他動詞の「切る」となったことも、複合動詞の組み合わせの不規則さの体現の一つと考えられる。このような自他のペアを持つ動詞から成された自-他あるいは他-自の組み合わせには、ほかに「探し回る」なども見られる。私はこうした不規則さの裏にもまた、複合動詞の結合条件として、各動詞の機能や特質との何らかの関係が秘められているのではないかと推測する。

先行研究

田中(2003)によると、複合動詞は、通常、前項動詞と後項動詞との意味や機能の関係から数種の型に分けられ、その分け方には諸説があるが、一般的には、影山(1993)の分析が注目されている。

影山(1993)によると、日本語複合動詞は、「語彙的複合動詞」(A類)と「統語的複合動詞」(B類)の二種類に分けられている。A類では動作の様態・手段、付帯状況、並行動作、アスペクト、など種々雑多な意味関係が観察され、しかも多くの場合、様々な程度に意味の不透明化や語彙化が進んでいる。

他方、B類の複合動詞にはそのような意味の慣習化は見られない。B類ではV1とV2の意味関係は完全に透明かつ合成的であり、補文関係として分析できる。

また、両グループのそういう意味的透明性の違いは概ね生産性の違いとも呼応するということが指摘されている。A類の複合動詞の生産性はV2に大きく依存し、様々な度合いが見られる。しかし、生産性が高い場合でも語彙的な結合制限があり、いずれにしても複合動詞全体の形を辞書に登録しておくことが必要である。他方、B類のほうは、ちょうど文や句が自由に作られるように、語彙的な制限を受けずに形成されると述べられている。

次に、A類とB類の間の画然とした差異として、影山（1993）は代用形「そうする」、主語尊敬語、受身形、サ変動詞、動詞重複構文の5つの統語部門に關与する現象を上げて検討している。その結論として、これらの現象を受け入れることのできるB類複合動詞は統語部門に属し、それと相容れないA類複合動詞は語彙部門に委ねられるということが出されている。さらに、A類複合動詞がB類複合動詞より先に形成されるわけであるから、A類複合動詞の外側にB類のV2が付くことができるがその逆はありえないことや、A類は2つの動詞の組み合わせに限られていて、3つ以上を重ねることはできなく、B類の場合はV1とV2の関係は統語構造において補文関係であると決まっているから、3つ以上の積み重ねも可能になることも述べられている。

複合動詞の組み合わせについて、これまでの研究においても詳しく論じられているが、まだ問題点が残っている。語彙的複合動詞の方は、影山（1993）によって項構造と語彙概念構造の二つのレベルで検討されていおり、松本（1998）によって主語一致の原則（二つの動詞即ち前項動詞と後項動詞の主語が同じでなければならない）と語彙の意味構造に関する諸条件から説明されているが、自他対応についてはまだはっきり論じ及んでいない。また、前述のような自他のペアを持つ動詞から成された自-他あるいは他-自の組み合わせの不規則さもまだ明らかにされていない。一方、統語的複合動詞は、影山（1993）によって他動詞型補文構造と非対格型補文構造が挙げられているが、『『始める、終る、続ける』』については動詞の形態上の自他と補文構造の型が必ずしも一致しない」という指摘もある。

したがって、前述のような複合動詞の研究における問題点について、資料を分析し、考察を進めることは日本語文法研究において価値あることと考える。

研究目的

そこで、本研究では、複合動詞の自他とその前項動詞および後項動詞の自他との対応関係の法則を探り、前項動詞と後項動詞の機能や特質によって複合動詞の組み合わせにどのような影響が与えられるかを明らかにしたい。さらに、自他のペアを持つ動詞が後項動詞にくるとき、前項動詞および複合動詞全体の自他と反対の自他を持つ後項動詞になるという不規則さはなぜ起こるのかを解明したい。

研究意義

本研究により、日本語学・日本語教育学における複合動詞の性質に関する研究に多少とも貢献でき、また、日本語学習者の複合動詞の習得に何らかの指針を示せればと思う。

研究方法

1. 文献調査

複合動詞についての研究を行うための、最初の一步は今までの先行研究を調査することだと思われる。これに際して、まず、書籍、論文などこれまでの日本語の複合動詞に関する先行研究の資料を収集しようと思っている。特に複合動詞の分類や性質、その結び付きや組み合わせなどに関わる文献を取り出し、整理する。その中に殊に注目する必要があると思われるのは、前述で取り上げた影山(1993)と松本(1998)、そして由本(2001)である。このほかにも、これまでの複合動詞研究の成果を概観している松田(2002)のような、本研究に關与する文献が多数であると予想され、研究の遂行に役立つものもかなり存在するはずだと思われる。

資料収集の件について、現在は既に実行している。必要な文献が全部揃い切ったとはまだ言えないが、着実に収集しつつある。

2. 総合分析

文献調査で整理したデータに基づき、まず複合動詞の分類に着眼し、その中で本研究にとってもっとも適切な分類方法を取り上げる予定である。そして、複合動詞を構成する前項・後項動詞の機能や特質を考え、自他対応や結合条件について総合的な分析を行う。今まで考察したところから見ると、形態的な面においても意味的な面においても、影山(1993)の分類は適切ではないかと思われる。ゆえに、本研究においては、主に影山(1993)の理論を踏まえ、研究を展開しようと思っている。

前述のように、影山(1993)は日本語の複合動詞のもっとも基本的な区別として、それを語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二種類に分けている。そして語彙的複合動詞もさらに項構造と語彙概念構造の二つのレベルで検討している。簡単に言えば、他動性調和の原則に従う複合動詞は項構造のレベルで形成されるもので、それに従わない複合動詞は語彙概念構造のレベルで形成されるものと考えることができる。他動性調和の原則とは、他動詞は他動詞と、自動詞は自動詞と結合しやすい一方、他動詞と非能格自動詞(意志動詞)の項構造は同じタイプを見なすことができるから、他動詞と非能格自動詞が混在した複合動詞も可能でありながら、基本的に非対格自動詞(無意志動詞)は非対格自動詞としか結合しないということである。したがって、影山(1993)のその理論によれば、項構造のレベルで形成される語彙的複合動詞のV1とV2の組み合わせはおおよそ以下のとおりである。

- A. 他動詞+他動詞：買い取る、追い払う、守り抜く
- B. 非能格自動詞+非能格自動詞：駆け寄る、飛び降りる
- C. 非対格自動詞+非対格自動詞：滑り落ちる、立ち並ぶ、生まれ変わる
- D. 他動詞+非能格自動詞：探し回る(他)、買い回る(他)、待ち暮らす(他)、漕ぎ回る(自)、付け回る(自)、見回る(自)
- E. 非能格自動詞+他動詞：笑い飛ばす(他)、乗り換える(他)、微笑み返す(他)、照り返す(自)、忍び返す(自)、ぶり返す(自)

一方、語彙概念構造のレベルで形成される語彙的複合動詞について、影山(1993)は「～込む」、「～去る」のような「特定のV2を含むものに限られるようである」と述べている。要すると、次のような組み合わせが可能である。

- F. 他動詞＋非対格自動詞：吸い込む（他）、巻き込む（他）、連れ去る（他）、考え込む（自）、攻め込む（自）、踏み込む（自）
- G. 非能格自動詞＋非対格自動詞：忍び込む、走り去る

また、非対格自動詞の V1 と結合できる V2 が他動詞である例として、「～出す」が挙げられている（意味的な面の違いによって、「～出す」を V2 とする複合動詞は語彙的と統語的両方あるという指摘がある）。

- H. 非対格自動詞＋他動詞：飛び出す（自）、抜け出す（自）、いぶり出す（他）

語彙的複合動詞においては、上記の 8 種類の組み合わせが可能であると言える。その中で、(A)・(B)・(C)・(G) の 4 種類はすべて自-自あるいは他-他の組み合わせなので、自他対応の面では問題がない。残っている (D)・(E)・(F)・(H) の 4 種類はそれぞれみな V1 に対応する場合と V2 に対応する場合が両方ある。

自分の初歩的な分析によると、(D)・(F)・(H) の三つのグループの複合動詞は V1 の自他に対応するケースが多いが、(E) の方は V2 の自他に対応するケースが多い。また、自動詞の方に対応するか他動詞の方に対応するかの視点から見ると、(D)・(E)・(F) の三つは他動詞に対応するケースが多いに対して、(H) グループはほぼ自動詞の方に対応し、他動詞に対応するのはわずかした見られないようである。これ以上については、また今後詳しく考察する必要があると考えられる。

続いて、統語的複合動詞の方についてであるが、前述で述べたように、影山（1993）の分析によると、統語的複合動詞は、「V1 と V2 の意味関係は完全に透明かつ合成的であり、ちょうど文や句が自由に作られるように、語彙的な制限を受けずに形成される」ものである。そのゆえに、さまざまな組み合わせを持ち、それに対する分析研究は、結合制限のある語彙的複合動詞よりまとめにくいように見えるであろう。しかしながら、語彙的な結合制限を受けないとはいえ、必ずしもまとめられないとはかぎらない。影山（1993）は統語的複合動詞を形成すると思われる V2 を以下のような意味グループに分類し、列挙している。

始動：～かける、～出す、～始める

継続：～まくる、～続ける

完了：～終える、～終わる、～尽くす、～切る、～通す、～抜く

未遂：～損なう、～損じる、～そびれる、～かねる、～遅れる、～忘れる、～残す、～誤る、～あぐねる

過剰行為：～過ぎる

再試行：～直す

習慣：～つける、～慣れる、～飽きる

相互行為：～合う

可能：～得る

語彙的複合動詞とは違って、統語的複合動詞は、他動詞・非能格自動詞・非対格自動詞の間での組み合わせはなんの原則の制限も受けず、自由だと考えられるが、上記の分類を踏まえ、考察を進めれば、そこに潜んでいる自他対応や組み合わせのなにかの法則も捕らえられるはずである、と私は考えている。

今後は、語彙的複合動詞と統語的複合動詞を別々にして考察し、主に影山（1993）が構築した理論に基づき、ほかに松本（1998）・由本（2001）なども加えて、研究を行おうと思っている。語彙的複合動詞の場合は前述の8種類の組み合わせから、統語的複合動詞は影山（1993）が列挙した意味グループの分類から、それぞれ形態構造・意味概念などの面で分析・考察し、研究を進めるつもりである。

最後に、博士前期課程での研究展開についてであるが、その2年間のうちに、本研究を遂行せねばならない。そこで、1年目の前学期は、複合動詞に関する文献資料の収集と整理を研究活動の主としながら、複合動詞の基本的な分類について徹底的に比較検討する。

ほぼ1学期の時間を使って資料収集整理などの活動をするのは少々時間がかかりすぎるかもしれないが、これまでの複合動詞に関する研究の発展状況から見れば、かなり膨大な量があり、それらを読んで整理する手間も含めれば、1学期ぐらいの時間が必要であろうと予測される。そして、1年目の後学期からは、前述で述べたように、先行研究の諸理論を踏まえ、収集・整理したデータをもとにして、本格的な複合動詞の分析・考察を行う。続いて、2年目に入ったら、前年度の研究の進展により、研究活動をより深く、より専門的に行う一方、その研究成果に基づいて、卒業論文執筆に取りかかりたい。以上が、博士前期課程における研究展開の見通しであるが、あくまで理論上築いたものであるもので、研究の状況によって、新たな見通しを立てたいと思う。

参考文献

- ・ 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- ・ 田中衛子（2003）「類義複合動詞の用法一考——日本語教育の視点から——」『言語と文化』
<http://leo.aichi-u.ac.jp/>（2008年6月8日取得）
- ・ 松田文子（2002）「複合動詞研究の概観とその展望——日本語教育の視点からの考察——」『言語文化と日本語教育』
<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/>（2008年6月8日取得）
- ・ 松本曜（1998）「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』144, pp. 37～83
- ・ 由本陽子（2001）「動詞から動詞を形成する語形成における下位範疇化素性の受け継ぎについて」
『言語文化研究』 pp. 453～473